

なり、義あるは、法約、東山、少て、義經、おま
う、く、始、く、長、く、客、お、う、波、能、の、結、う
う、い、て、平、族、と、討、ん、と、議、う、ふ、事、お、ま
—て、義、經、お、お、り、て、と、と、新、一、松、根
—の、令、お、う、て、平、族、と、中、お、う、時
も、さ、ま、ふ、う、う、て、曾、武、智、深、の、さ、り
文、治、平、中、相、約、と、お、あ、—、て、義、經、治、中、と
序、さ、う、時、夫、人、時、大、細、云、—、と、い、さ、あ、い、何、人、事、成、
故、と、平、の、義、經、を、お、う、と、辨、度、お、う、は、り、

ゆ、と、く、深、む、う、あ、ふ、—、と、う、う、う、う、う、あ、お、ふ
辨、度、さ、う、と、う、て、回、遍、夫、人、お、う、あ、と、ま、と、と、お
を、由、え、ん、や、と、い、さ、あ、て、辨、度、う、と、う、い、う、て
夫、人、の、お、ま、と、れ、—、切、て、思、考、の、お、あ、ふ、ゆ、う、て
う、て、主、従、十、何、人、山、伏、の、形、ふ、さ、う、あ、い、山、渡、り
—と、お、も、む、と、う、う、う、う、う、或、と、言、お、或、と、ま
の、園、—、と、も、辨、度、う、け、の、衆、と、も、つ、て、能、あ、く
通、う、て、あ、こ、の、海、う、あ、り、色、の、長、松、頭、と、ま
もの、ね、人、の、山、伏、と、い、ふ、へ、と、新、法、の、う、と、ま

[illegible]

教達して衣川鼓より合致と辨度り然
 して堅固と能く大鼓と辨くも辨め如し
 鼓をおりてうたれども大鼓の如くうた
 して鼓の中をうたうては是より辨
 度り教多きものなり。若し神いともうたふを
 内に入ると義理とねももて曰天運と
 わきうて人事なりとねぬ。若し神いとも
 ありへしと程と事とあてと獲ては
 我々も一と程と事とあてと獲ては

かゝる君の傍ともあまし〜と死後の事と
ちうひて誅おして悔く欲はくむひて十
文をふけ能く巴の事おつあ〜欲は
は殺さるねと知む一人の官力も解れ
くね方のさゆ〜と〜ものゝ〜辨慶澄
少主失と折けりて悲つうあふ長口と村ふ
つゝ〜死ふと〜死〜と〜く〜けて死つう〜

孫原忠光

東鑑記

忠光を姓ハ孫原上福女中と孫尉と孫次平
家如等の回信ありわ國西山の麓いゝか宮武
のやまれりて連人〜は源頼朝と鎌倉あり
新遠の冲堂と〜と〜は彼地〜と〜と〜と
是のやよりふち々〜と〜と〜と〜と
眼育〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
み見〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と
誰人のさうつらせり〜と〜と〜と〜と
是時〜と〜と〜と〜と〜と〜と〜と

らも借^{かり}はかりに師をまふ命をうゑこれと云ふ
 揃^{そろ}て見^みる懐^{ふところ}の中をまふ命の折^ひりと
 まふ命の育^いつとてうゑふ命のうゑと
 目の上を落^おひてうゑ言^{こと}をうゑのうゑと
 うゑをうゑうゑうゑうゑうゑうゑうゑ
 うゑ文^ふ治^ちふ平^{へい}氏^し一^い族^{ぞく}こゝろを西^{せい}山^{さん}とて賦^ふ
 うちうゑて家^かを幾^い城^{じやう}とてうゑうゑてま
 懐^あと懐^ふうゑうゑうゑうゑうゑうゑうゑ
 うゑうゑうゑうゑうゑうゑうゑうゑ

けんと帰るにねりて月深きなりと
 ねりて宿りてさきもいとてさきも
 ねりてさきもいとてさきも
 ねりてさきもいとてさきも
 ねりてさきもいとてさきも

河津兄才東臨

曾我抄所

子あり是より十部祐成
 祐成時子より河津三郎藤原の祐成より
 一萬
 祐成
 子あり是より十部祐成
 祐成時子より河津三郎藤原の祐成より
 一萬
 祐成

一萬

才、如、時、系、龍名
呂王

とてううあえ二年十月の辰巳おる
の猶^{なほ}少^すて祐^{すけ}おちるもあふりて
令^{しづ}とれともこれより祐^{すけ}ゆるおあう
うの時祐^{すけ}おあふ時^{とき}家^けらあう祐^{すけ}
おあうちやうと死^しとてちやう
年のちて父^{ちち}の仇^{かたき}とむくといて
流^{なが}うやうう九^く七^{しち}の年^{とし}のうら親^{おや}と
おあふ涙^{なみだ}うう付^つあふ祐^{すけ}や草^{くさ}おと見^み
ううううのうわとあうおちお矢^や

とてううと仇^{かたき}おちるうとて祐^{すけ}おあ
とちてとて仇^{かたき}とむくひつとて祐^{すけ}おあ
むれ家^け根^ねら祐^{すけ}の祐^{すけ}おあうとて父^{ちち}の
お令^{しづ}とてあうとてのうとておあう
うの時^{とき}家^け十^{じゅう}一のうとて母^{はは}僧^{そう}ふとて家^け根^ね
山^{さん}へのうとて時^{とき}家^け家^け根^ねの祐^{すけ}おあう祐^{すけ}
とて年^{とし}のうとてちやうとてちやうとて
うとて祐^{すけ}おあう仇^{かたき}のうとてちやう
めううううひとれとてちやうとて祐^{すけ}

うの志とやうしうの僧とあるを祐めうふ
辰う母とていつて對面せしと又才とて
のひまといふやうに彩の形ふとてうや
なり形とてうに奴僕とて人のまゝあふ厚
うとて奴僕とてうにうとてうとてうと
仇と報とてうとて志とてまゝ人のまゝのこれ
わつた頂上とてあふ備とてあふ又才とて
兼ふとてうとて奴僕とてうとてまゝうとて
もやう宿とてうとてうとてうとてうとて

まゝとてうとてうとてうとて仇とてうとて
とてうとてうとて又才とてうとてうとて
とてうとてうとてうとてうとてうとて
ハ平生の志とてうとてうとてうとて
あふとてうとてうとて仇と報とてうとて
やふとて又才とてうとてうとてうとて
仇と報とてうとてうとてうとてうとて
祐めとてうとてうとて母と報とてうとて
母の志とてうとてうとてうとてうとて

もべーとふ時、今年比母の如くふかきことな
りて、もたうとゆふに、最期の時、西へ
城跡——足牙母の如くふかきことなり、
夜ふかしひし時、家を如くとゆふに、
収ひ足牙母の如く、そとを如くと
ぬつて、ふかきことなり、
ふかきことなり、母の如く、
おろし、足牙母の如く、
て、おろし、
神のおろし、

[illegible]

くらゐりありふとてかすりる月共の
 刻よりありふとてかすりる月共の
 子の太刀と刀とてかすりる月共の
 むまんてふとてかすりる月共の
 佩て客ふ屋敷の中へ志のび入
 士ふひとてかすりる月共の
 り梨衣經ふ金ふとてかすりる月共の
 欲ふ銭ひとてかすりる月共の
 いふとてかすりる月共の

見まゝに舎の中へ入らう。祐経は却て其を
巾狭うして四人の仇とありて、いふうゝに寐入
うまやとおうらう。わい祐経死して太刀とて
之とも祐経もあつたらねの肩先とてあつた
振のりへ切て、底も肘も腕の骨とてけし
体よりよく切落し、小刀と焼て、こゝろに刺
し、足才短とけけておろし、こゝろに蹴蹴し、大
きく焼ぶ。そ付入るうゝに、底も腕も
りねも、あひのこゝろふみの仇とてけし

幸とねむひのこゝろのうきぢやどー落
 り、母もさ^{そふ}親おまへへーさるゝごみち
 死せんといつて又才うなうかのあらうた
 河津え才の志をみてふ父の仇と執ゆも
 ならん祖父の仇ともさうむねあはれ
 ねねづの敵おまへの法人おまへでわき
 宿あるの事、常しくいそぐなり雷雨の
 こゝろ敷くところ信杖^{しんざう}様とらゝあひ東
 雪ふ迷ふ又才骨力あはけりて戦ふは

りらうぬふらうらうらのねず人、祇と象ふ
 ひもものねとふも新田たむと、祐おね親ふ
 祐おね度親とて、おかお学れぬねね人と討し
 血の太刀と傳ふや、午の内ちがく肉さうり
 太刀ねく月書きんとも忠常、逐ふ討て
 けり十二時、時宗はあがり進めて、敵の中へ
 入りふねねつて、鉦こらしてさふゆひ戦ふ
 大友能と諒めると先をとり、既ふ小善人
 臺より九時、高くと向ひかどめり

つゝおきり底の刻ふおねわつめの沖あふ時
ふあといえーおききし得中をふみ新官太
氏いしておけの宿とてちつね甲れん
きだ時ふおきり日我を洗滌とてく
とも供ふのをむのこしらんとやあ
みくつくあめんやあふあふあふと速
と欲もたまやと速くべしとふおねわつめと
あふといひて日回ふ時ふおねわつめ九
時ふ七時ふこのころ頻ふ供と欲わ

のあといひてくべしとふおねわつめ
今既ふ累年のがひ足まて鼓の中へ
る事と祖父お親洗滌とてく其恨とあ
おねわつめおの沖あふ日書せんといふ
ちうといふおのちうとてくおねわつ
おねわつめおのちうとてくおねわつ
と猶おねわつめおのちうとてくおねわ
くといひてくおねわつめおのちうと
うきくおねわつめおのちうとてくお
うきくおねわつめおのちうとてくお

[illegible]

小村上義輝もこの所へ来て、宮へ参りんと志
うふ。芋粥の道ぬ、芋粥を食ふ宮の内旅と
しててもよくて、義輝のやゝく事柄の極と
四つふまじとして、義輝はふねぐて大凡の
妙あるお柳の事業やりのこともわづかしく
といふうちに、移住する人の旨をついて、さ
しげに投書する。芋粥を胃力小怖きこと
そとやうせんともちよと、義輝自ら沖旅に着
小縣へ参り、ゆめ宮へ入られ、その物と

成りし後、城主吉井の城を奪ひ、さふ
 平軍に事ごとく改む。宮方跡に戦ふことも
 平軍はさふ事ひなく、火を起し、改戦ふ
 城主自力として戦ふ。吉井と葛原をさふ
 とくとも、軍を強くもくあふし、さふ。城主
 ももとあひり、いりて、城主さふの大庭をさふ
 辰、最期に、酒を飲り、村上義輝を二の
 木とて、さふ。お戦ひり、さふ。酒を飲り、さふ
 ず、さふ。さふ。さふ。矢十、さふ。さふ。さふ。

沖方ふ事りて曰く、所ふ元より沖方の事を
 小政まじは城少く切と云ふも今も計し
 也。是處に於てありへし、沖方に残る而も残ふ
 そまゝに欲追想なりん、必き何れもあらずともわ
 きつう海の小程あるを、沖相見るとして流ひて
 沖澤の多きに依りて欲と流して沖令ふ伐る
 け免さんとす。水を取去らざるとゆへに高次
 一兩ふ能く角も外らんとのやうな義經河を
 ひ流し、河字の業ゆる圍ま——時に信令ふ

討りし矢ふ十餘ヶ所底とあり小島の一村あり
るすく入る枝り切し死ふる枝といふるふす枝
藤原

藤原重純

重純姓も藤原安ふた令と名し母も境入
氏とありありとふふふふ代はうてた
知れしうふふふふ相模守さう時の伐木
うて長崎園をふた枝柄とさうやふま
ふふふふてふふふと潜る地いふふふ

討られしふふふふふふのふふふふ一族
郎等つとさうと令とふふふ新田氏
の上ありとふふふふふふふ新田
層一ふふふふふふふふふの四我を祖
東重氏と治水ふふふふの付大場氏
層一ふふふふふふふふふふふとせし
時政ふのめふふふふふて子孫おぼふふ
ふふふねふふの領主とありふふ今僕ふ
二ヶ所と城とありふふふふふふふふふ

と悔くも河へさる我の所少てつきてふ
不足ありのうゝも伊豆國西条の庄我
頗るうゝふ今の所と對もぬ十倍ふさう
前の所と云ぬと河うゝさうりもあらず
ちのちぬぬ不義の河ひりうゝと先程の
所あり人も欲ふひぬと河うゝはあやも
うゝものあるふと戒めりうゝ月亦うゝ義貞の云
濡金ふ改入る平族よりくゝあひし時聖
考とくく一族ゆゑもくゝくく河津光親

うの物骨やうく上より忠孝賞なりき今言
 時とて遠近のこりく忠孝なり義貞公よ
 うに極まり聖孝の義貞の早くとて面くさうと
 再とてえられい聖孝なり忠孝なりとさうと
 心とてえられい聖孝なり忠孝なりとさうと
 二ヶ所の忠孝なり忠孝の領地と二万七千石
 けりてさうのこりく忠孝なり忠孝なりと
 忠孝なり忠孝の忠孝なり忠孝なりと
 忠孝なり忠孝の忠孝なり忠孝なりと
 忠孝なり忠孝の忠孝なり忠孝なりと

危^キ難^{ナン}ふ^ハ室^{シツ}を^シて^ハい^ハや^ハー^ハも^ハそ^ハの^ハ所^ハと
 思^ハひ^ハて^ハ石^ハの^ハ所^ハと^ハい^ハふ^ハく^ハあ^ハら^ハん^ハま^ハに^ハ
 吾^ハら^ハふ^ハち^ハう^ハと^ハお^ハも^ハこ^ハに^ハれ^ハう^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハこ
 も^ハ難^{ナン}所^ハの^ハき^ハと^ハ卒^ハし^ハて^ハ梅^ハ津^ハ川^ハま^ハに^ハ馳^ハ向^ハひ
 う^ハと^ハあ^ハく^ハの^ハ戦^ハひ^ハふ^ハ士^ハ卒^ハま^ハく^ハい^ハふ^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハ百^ハ金
 騎^ハあ^ハら^ハう^ハあ^ハら^ハう^ハ重^ハき^ハま^ハも^ハい^ハふ^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハ
 い^ハう^ハ館^ハの^ハ門^ハに^ハ追^ハつ^ハて^ハい^ハふ^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハ
 も^ハや^ハ城^ハの^ハつ^ハら^ハう^ハお^ハも^ハか^ハい^ハ書^ハあ^ハら^ハう^ハは^ハ後^ハを^ハり
 ち^ハう^ハと^ハれ^ハち^ハう^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハい^ハふ^ハと^ハ

今もあゝこの時の鼓も猶も東條を平くしつゝ
 辰^いのうもいふもわたりつゝおは聖者いふも鼓
 の焼^{やけ}けいもいふもいふも沖^うの法王^{はう}は死^しの
 言^いふもいふもいふも死^しの言^いふもいふもいふも
 つねもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 いかうもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 のうもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 は死^しもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

もろのぬふ死んもろ命もや津維の焼
りしつてんちつふ日書やんとてうらのと
ふわつるそ百餘法とてつて小町ふり
つものおはのいづ塔のつりてるより
むかきつ河とてとせも今ねさへ大庭言
端のあきれりて一戸一戸のつりて
もろむき一服友親親も我場ふ戸との
のろやうふ極つてふきつてはまもろや聖
者なもてとれつて忙押つてあふ義

負のふれ屋つて使つてはまもろあふ
けけつて何もあつて人といひてはまもろ
はまのりてはま今もつてはまもろはま
おつてはまあつてはまはまもろあふ
とてはまふ書つてはまもろはまもろあ
ふあつてはまのあふはまもろあふ
ふとてはまあつてはまもろあふ
ふとてはまあつてはまもろあふ
ふとてはまあつてはまもろあふ
ふとてはまあつてはまもろあふ

武官とある人ふ知るる事ありつて
難^あふ事ありていふれをす人し難^あく
りするものありんや禽^{きん}然^{ぜん}やおかし
き女娃のつとめふとく人なれと
て義貞^{よしさだ}の事とある事あり
るべしと人を割^やとある事あり
やとある事ありとある事あり
つとめありとある事ありとある
事ありとある事ありとある事あり

ありとある事ありとある事あり
とある事ありとある事ありとある
事ありとある事ありとある事あり
とある事ありとある事ありとある
事ありとある事ありとある事あり

万里小治藤房 太平記

藤房^{ふじふさ}と姓ハ藤原^{ふじはら}二位の中納言少^{すく}万里
小治^{こぢ}重^{おも}ね^ね官^{くわん}房^{ふさ}の太^{たい}序^{しよ}あり後醍醐^{ごていこ}帝
より祚^そりて藤房^{ふじふさ}とよとてとある
政^{せい}ねとある事ありとある事あり

あともうえんふとあひ、追てゝゝと補へ
とあひて國と云ふとあへんと欲され
とも帝をふ執り、海と書きて、政をふ
りふふの沖と云ふ、けと機とむつと
海と云ふ、あへとも、あき城もちつとあへ
その比雲州のや、海、城、治、る、兵、治、る
と執り、りて、帝、まう、こ、ひ、て、龍、文
の、う、ゆ、め、り、て、ま、う、も、あ、り、そ
沖、お、の、興、と、う、つ、ま、う、帝、龍、の、あ

あ、山、と、和、向、り、ふ、龍、は、ま、う、の、ま、う、
り、と、あ、房、和、ま、う、回、中、お、あ、ま、う、の、あ、
り、と、ま、山、の、龍、と、ま、う、あ、り、と、
お、人、う、ふ、ま、う、あ、り、と、海、の、ま、う、
ま、り、と、執、り、と、ま、う、と、文、帝、と、ま、う、と、
り、と、あ、相、と、ま、う、と、海、と、ま、う、と、
ま、う、り、同、の、世、と、海、と、ま、う、と、
ま、う、れ、國、政、廢、れ、ま、う、と、海、と、ま、う、と、
ま、う、と、海、と、ま、う、と、ま、う、と、

とつてあつては妖災とやうに戒と
あつて今これの民衆人困る天下の事
とつて執政補とはさ人の世にふた
は表とすつて主の漢と西をるふ
あまふふ漢と主の漢と知つて
邪にまふおわつて國のあつて
己の情れよふとつてあつて
あまふふ漢と主の漢と知つて
邪にまふおわつて國のあつて
己の情れよふとつてあつて

はふふとつてあつて
あまふふ漢と主の漢と知つて
邪にまふおわつて國のあつて
己の情れよふとつてあつて
あまふふ漢と主の漢と知つて
邪にまふおわつて國のあつて
己の情れよふとつてあつて
あまふふ漢と主の漢と知つて
邪にまふおわつて國のあつて
己の情れよふとつてあつて

くろんハ執事と申すお河を大祝の用や
て本年の用におむねけりともお祈りなすも澄
らう人共物と毒まゝして昔人と異ひ迄病との
まゝに仁政を以ていへる夫れよく是れとお
て災とみえ別過といふても是れ不徳いふ
とも治年あらんと誠と至る一之そのそ
うも奏しつゝわが帝尊をもと祭しめん
法は其御すなりま日のお祈りと因り
つゞきより藤房よりおつゝもつゝお祈

事あるも帝遂に許さず。とあるは藤原
 世ふたつありき。と云ふは、後うしとて、
 とくとうは客とも、藤原とも、此ふくー
 のいへ大内造等も、まゝ茶箱植ひ込の沖遊
 も、ようきうりあうりし。とて、藤原の捕さぬと
 亭をわきて、今宵月清く、やそふとお
 もしうりねむきよ酒んとせしの中れるも
 物語に、秘剣のひいて藤原の回帝座
 のつぎのと沖遊もありとて、下りの政るも

かの馬のさうひさく言の便候なりて主
咽とく癒く言の直義の馬の婿馬
うく流る護る親王と潜る親王花七
馬あふりまうく史教の切たふりて義
の沖あふりてと壁あふの流海ふりて意
孝信義あふりて流るるやうくと世に
言の直義かやと流るるやうくと世に
ての馬のさうひさく言の便候なりて主
候へ候へ言の直義の馬の婿馬

いと欲と義の馬の婿馬
と義の馬の婿馬
あふりてと流るるやうくと世に
予智知てと流るるやうくと世に
候へ候へ言の直義の馬の婿馬
の馬の婿馬
いと欲と義の馬の婿馬
と義の馬の婿馬
あふりてと流るるやうくと世に
予智知てと流るるやうくと世に
候へ候へ言の直義の馬の婿馬
の馬の婿馬

ともや—と爲へて心も潤くわさく
 まふやうに治へともう天とと集れ
 心もあう抱きとも僕あひして何んぞ
 中々もいふ人あを奪れ—うもの
 あつて世の成り抱へとも見えてさう
 花房つさそ御も思ひやうあとも
 ま激うともむづのちと此法して
 振さあつてむづ—秘信留—お情
 ま—ま親に朋堂—て右と—む雨

まゝ先奸情を振るゑるに、質を押しこみ
 ーさうと消さう、私とすゝめ、同家おそー
 りとそと託すもの、ゆゑ、天りの七年ハ
 ゆゑとあらえものふ、悉く、局へー、
 て、仁と、懐け、義と、いそ、
 局ももの、ゆゑ、今日も、
 まゝ、
 局ももの、ゆゑ、
 まゝ、
 局ももの、ゆゑ、

主家の忠告をきくはあつてもかぬてうへ
のうへにのうへにうへにうへにうへに
まゐるをうへにうへにうへにうへに
のうへにうへにうへにうへにうへに
まゐるをうへにうへにうへにうへに
つゝうへにうへにうへにうへに
とあひうへにうへにうへにうへに
かゝる藤原のうへにうへにうへに
池部とねーまゐるとあひてうへに

今日とあひてうへにうへにうへに
何とてうへにうへにうへにうへに
あひてうへにうへにうへにうへに
うへにうへにうへにうへにうへに
うへにうへにうへにうへにうへに
うへにうへにうへにうへにうへに
うへにうへにうへにうへにうへに





